折れない葦

京都新聞社「折れない葦」取材班 著

医療と福祉のはざま、生々しく

京都新聞の読者にとって、「折れない葦」というタイトルはまだ記憶に新しいだろう。二〇〇六年前半に朝刊で連載された記事が一部加筆・修正された後、単行本化されたのが本書である。連載は〇六年度の日本新聞協会賞を受賞した。

医療と福祉の現実を知り、それを伝えたいという連載企画の目的は、読者から予想を超える反響があったということからも、かなりの程度達成されたと言えるだろう。記者はどこまで当事者の生に肉薄できるのか、また、既存の医療・福祉制度では受けとめ切れない「悲鳴」や「うめき」、「声なき声」にどのような言葉を与えることができるのか。こういった課題に積極果敢に取りくんだ記録として本書を読むこともできる。

そこに記されているのは、生の悲哀を生み出さざるを得ない公的援助の限界であり、法制度の矛盾である。医療と福祉は別物ではない。両者のはざまにさまざま障壁があり、そこで倒れ、また追い詰められていった人々の姿を本書は生々しく描き出している。

しかし同時に本書は逆境の中にあって、その生を輝かせている人々がいることを力強く伝えている。当事者のたくましさだけでなく、そこにかかわる人々の間からにじみ出るような暖かさは、読者を勇気づけるだろう。

本書が扱っている医療と福祉に関する問題の多くは、日本社会そのものが抱えている国政レベルの課題である。しかし、京都や滋賀を中心に行われた丹念な取材が訴えるのは、これらの問題がいかに身近なところで起こっているかということである。文章の合間に挿入されている写真の数々は、語られている事柄に読者を引き込み、想像力を駆り立てる役割を果たしており秀逸である。

本書が示しているような医療と福祉の現実を直視し、共有することなく、納得いく生き様、死にざまを見いだすことは難しいだろう。その意味では、すでに連載を読まれた読者を含めて、多くの人が本書を手に取り、共に語り合う「生きた素材」として用いられることを期待したい。

（小原克博・同志社大教授）

（京都新聞出版センター・一八九〇円）